

文化

祈ることは重要な行為である。誰でもどこでも、どんな宗教でもできる。世界中の人が行っている。だから祈りという行為を通じて、世界中の人と繋がることができる。そしてその先の一歩を踏み出せる。

東京大空襲

1945年3月10日、東京大空襲では約2時間で、市民およそ10万人が米軍の焼夷弾の犠牲になった。道や川には遺体があふれ、その上を歩いたり避難のためリヤカーをひかざるを得なかった人もいた。リヤカーの上で「ごめんさい」と繰り返して祈りつづやっていた少年は、戦後67年経った今でも毎月10日に、地元町会で慰霊を行っている。

毎年3月10日前後には、東京各地で慰霊祭が営まれる。多くは高齢者が、雨や雪の日でも手を合わせ、死者のために祈り続けてきた。体験した人は、そうしないと生きてこれなかったのだと思っ。

知らない者にも祈る自由がある。悔あつてこそ数年、私は「仮埋葬地」を訪ねている。仮埋葬地とは、東京大空襲以後に始まった遺体の埋葬方法である。

東京大空襲の場合、遺体は都内70カ所以上の公園や空き地、寺院などに仮に埋められた。数年後に掘り起こし火葬され、現在の東京都慰霊堂に安置されている。毎年3月10日前後には祈りを捧げるため、多くの人が慰霊堂を訪れる。

東京日本大震災

2011年3月11日の東日本

大空襲、大震災…二つの仮埋葬地を歩いて——広瀬 美紀

未来へ繋がる祈りの力

大震災では、2万人近くが亡くなった。いまだ行方不明の方もいる。高城町では六つの市で、2108人が仮埋葬された。震災後の混乱、火葬場の被塞、増え続ける遺体……。通常の埋葬ができなかったのは、仕方がないと思う。各自自治体それぞれの方法でできる限り手厚く葬られ、同様に改葬も行われた。

現場の人が日常的に丁寧に、作業をされていたのだらう。掘り起こし作業では棺を持ち上げる際にロープやひもではなく、さらしを用いた。また、棺が途中で壊れた場合に備えて、拒否が用意されていた。相手は人なのだから、医療用の器具を選んだそうだ。故人や追族に礼を尽くす思いが、そうさせたのだらう。遺体は袋から出され、シャワーで洗浄された後、通常形式の納棺が行われた。

納棺士としてのプロ意識がそれをさせる。掘り起こし作業員は、白い装束や紺色のカッパを着て、ビニール製手袋、プラスチックのマスクも着用。ショベルカーで土をかき、続いてスコップで土を出す。1人を掘り起こすのに30分ほどかかった。気仙沼市では、A-11やA-112といった順で、木の墓標が建てられていた。だれでも自由に仮埋葬地を訪れて、手を合わせることができた。動物も多く訪れる。だから遺体は荒らされないよう、約1センチ50センチの深さで埋められていた。

掘り起こしは役所、建設業者、葬祭業者がチームのように結束して行う。祈りを捧げた後、ショベルカーとスコップで慎重に土をかき、棺を持ち上げる。棺から土を払い、側面をはぎ取る。遺体が包まれている袋にカッターで穴を開けると、赤い液体が流れ出てくる。においがする。言葉にならない。一人が液だまりにしゃべり、土をかけ、他の人は布で丁寧に袋をふく。遺体を毛布でくるみ、数人でテントへ運ぶ。新しい毛布で再度くるみ、新しい棺に納める。白い着物や数珠なども丁寧に入れられ、霊柩車で火葬場へ運ばれる。

誰かが被災している中、遺体はどこでも考え得る限り、丁寧に扱われていた。

死者のため、生者のため

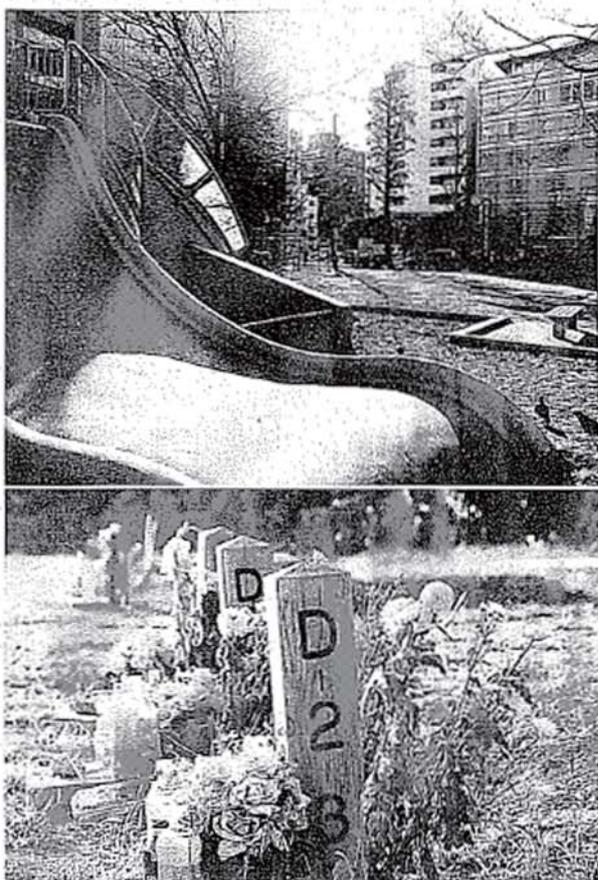
東京大空襲時と今回の震災の仮埋葬地での違いは、亡くなった方々の扱われ方である。

大空襲の際は「大きな穴にトラックを横付けし、遺体がドサドサと投げ入れられた」と、実際に見た人から聞いた。戦時下では、それが当たり前になるのだらう。

しかし、そんな時でも人は祈っていた。仮埋葬された家族を見つけた人は、手を合わせその場で折り続けた。

およそ70年の時を超えた二つの仮埋葬地をみて思う。祈ることとは死者のためでもあるが、自分のためでもある。若い人はその姿を見て、いつか祈ることの大切さに気付く。そして祈りを通じて伝えたいことが、未来へと繋がっていくのだらう。

(ひろせ みき) フォトグラフ A-1、1977年生まれ



東京大空襲の仮埋葬地の一つ。敷地いっぱいには遺体が仮埋葬された。その数70。焼夷弾の火から逃れ、隣接する交差点にたどり着いた人が多かったそうだが、東京大空襲で2009年冬、東日本大震災、宮城・気仙沼の仮埋葬地。ある人は逃げる途中、車ごと遺体さらわれ、ドアを開けて脱出できたが、家族の姿をみることができなかった。仮埋葬された遺体は、何を願うのだろうか。11年9月27日、2枚とも筆者撮影